



豊玉二中だより

令和2年度 第11号
発行日 2月1日(月)
練馬区立豊玉第二中学校
校長 神山 信次郎

新学習指導要領の実施に向けて

副校長 木原 賢三

如月2月、学校では今年度の教育活動の成果を振り返るとともに、新しい年度に向けて、準備を始める時期となります。今年度はコロナ禍の影響で、修学旅行やスキー教室などが中止になったり、運動会や部活動の大会が縮小されたりしてきました。特に、豊玉二中の最後の年となる3年生にとっては制限された生活の中、我慢することが多い年となりました。しかしながら、そのような中でも運動会では、自分たちが今できることを一生懸命に頑張ろうと競技や係の仕事に努める生徒の姿があり、本校の生徒の立派さを実感しました。さらに、「ピンチはチャンス」。今まで、当たり前に行われてきた教育活動が見直され、ICTの活用やオンライン授業の導入など大きく学校の教育活動が変化した年となりました。そして、中学校では令和3年度から新学習指導要領が完全実施となり、「社会に開かれた教育課程」をめざし、日々の教科の授業が探究的な学びへと変わります。学びの変化は、これまでの生徒が「何を知っているか、何ができるか」という知識や技能を身に付けさせる授業から、身に付けた知識や技能を活用し、「学んだことをどのように生かしていくか」という生徒の自律的な学びを促していく授業へと変わっていきます。さらに、「指導と評価の一体化」をめざし、生徒の自律的な学びを促すために、「評価」が変わります。

学習の「評価」とは、「生徒の知能・学力・適性等の変化を、教育目的に照らして価値判定をする」ということだけではなく、「これによって授業計画の改善や学習の動機づけをし、教育効果の向上を図ること」を指しています。今回の学習指導要領では、観点別学習状況の評価が4観点から、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性」の資質・能力の3観点による評価となります。そして、探求的な学びを追求する学習内容と直結し、指導した内容の評価を生かし、次の学習を充実させる指導と評価の一体化が、今こそ求められます。しかし、これまでの評価は生徒たちの学習状況の把握に重きがおかれ、授業改善・学習改善に直結しにくい傾向がありました。今後は、新たな単元に入る時には単元を通した学習のめあてを示す、学習計画を示し見通しをもたせる、評価の時期や方法を伝える、振り返りを丁寧に行い次の指導に活かす等、教員が生徒一人一人、前の学びからどのように成長しているか、より深い学びに向かっているかどうかを捉えていくこととなります。このことこそが生徒自身へ還る指導と評価の一体化の姿であると考えます。

今回の新学習指導要領を通じて目指すのは、学校を地域社会に開き、生涯にわたって自ら進んで学び続け、地域社会の発展に貢献することができる「地域の宝」である生徒の育成です。今、まさにコロナ禍の中、先行きが不透明で、変化が激しい社会の中で、『自分探し』に取り組み、「自分がどのような人間なのか」「自分らしく生きるとはどのような生き方なのか」について、試行錯誤しながら探求し続ける姿勢を育てることが必要です。本校では、すべての教育活動において学び続けることに向かう「地域の宝」である生徒の主体性を育成していきます。

今後、新学習指導要領の本格実施に合わせて、質の高い教育の提供をめざし、さらに「確かな学力」の定着・向上を図っていきます。そして、学習指導とともに、評価の改善の取り組みを推進していきます。今後、学習の(教育)評価について、日常的に通知表や面談などを通じて、生徒や保護者の方に十分説明し、生徒と保護者と共有することができるように努めてまいります。保護者・地域の方のご理解、ご協力をよろしくお願いいたします。